

第 37 回 日本受精着床学会総会・学術講演会

0-49

東京, 2019.08.01-02

未成熟卵体外成熟－体外受精（IVM－IVF）と体外受精（IVF）における胚盤胞期胚移植妊娠成績の比較検討

○加部 杏子 1、 尾形 龍哉 1、 水野 里志 1、 福田 愛作 1、 森本 義晴 2

1 IVF 大阪クリニック、2 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】 未成熟卵体外成熟－体外受精－胚移植法（IVM－IVF－ET）は基本的に卵巣刺激を必要としない為、卵巣過剰刺激症候群（OHSS）の回避に有効である。当院では、当初 IVM－IVF では分割期胚移植を行っていたが、2016 年より胚盤胞期胚移植を導入した。今回 IVM－IVF および IVF の胚盤胞期胚移植における臨床成績を比較したので報告する。

【方法】 対象は 2016 年 1 月から 2017 年 12 月までに実施した 39 歳以下の 991 周期。そのうち未成熟卵体外成熟－体外受精群（以下 IVM 群）が 22 周期、体外受精群（以下 IVF 群）が 969 周期。受精方法は全て顕微授精である。その両群間において平均年齢、平均採卵数、成熟率、受精率、胚盤胞到達率をそれぞれ比較検討した。さらに臨床妊娠率を、新鮮胚移植と凍結融解胚移植に分けて比較した。

【結果】 平均年齢は IVM 群が IVF 群より有意に若く（ 32 ± 4.4 歳 vs 35 ± 3.3 歳： $p < 0.05$ ）、平均採卵数は有意に多かった（ 13 ± 9.2 個 vs 10 ± 8.5 個： $p < 0.05$ ）。成熟率及び受精率は、それぞれ IVM 群が IVF 群と比べて有意に低い値を示した（ 25.2% vs 79.5% , 73.0% vs 82.7% ： $p < 0.05$ ）。胚盤胞到達率及び臨床妊娠率に有意な差は認められなかった（ 37.0% vs 40.0% , 新鮮胚移植： 50.0% vs 53.6% , 凍結融解胚移植： 30.8% vs 49.5% ）。

【考察】 OHSS のリスクが高い若年患者に対して積極的に IVM－IVF を実施している為、IVM 群において平均年齢が若くなったと考えられる。IVM 群での成熟率及び受精率が低かった理由は、IVM－IVF はほとんど PCO 患者に実施されているので、患者背景の違いにあると考えられた。しかし、IVM 群と IVF 群で受精卵からの胚盤胞到達率及び臨床妊娠率に差異が認められなかった点から、IVM－IVF－ET は PCO 患者にとって OHSS のない有効な治療と考えられる。しかしながら、依然として IVM－IVF における成熟率の向上が課題として考えられた。